

旅行の医療支援策

Medical support system of tourism

JTMバリアフリー研究所 所長 草薙威一郎 *Ichiro Kusanagi*

Key words

ユニバーサルデザイン, バリアフリー, 旅行, 観光, 慢性疾患

Summary

観光ユニバーサルデザイン(以下、観光UD)は、「年齢・性別、言語・国籍、能力のいかんにかかわらず、すべての人が同質で同等の旅の楽しみが享受できるツーリズム」である。高齢社会を迎えたわが国では、観光UD推進が重要な旅行課題になってきた。観光UDでは交通機関、観光施設などのハード面、介助・医療などのソフト面、旅行情報、旅行商品などのシステム面の3つの分野がある。その中での医療課題としては、古くから温泉

湯治に代表される保養や健康増進面の課題、最近多くなってきた慢性疾患や生活習慣病のある人の旅行促進、旅先での緊急時や救急時での対応課題などがある。慢性疾患のある人の旅行では人工透析療法、在宅酸素療法、人工肛門・人工膀胱、心臓ペースメーカーの旅行支援策が行われている。今後も観光UDの観点から、より広い旅行支援策が望まれるところである。

はじめに

近年、できるだけ多様な人々に適用できる製品や仕組みをデザインするという「ユニバーサルデザイン(UD)」の言葉が一般的になってきた。筆者は、旅行のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化に関心をもち、「誰でも・自由に・どこへでも」旅が楽しめる社会環境をつくるための活動を行って

る。本論では観光ユニバーサルデザイン(以下、観光UD)の構造と、その中での医療課題や呼吸器に関する旅行課題について述べてみたい。

I 観光UDの中での医療の位置づけ

1. 旅行の現状

わが国では毎年、国民1人あたり

1.18回の宿泊を伴う国内観光旅行を行い、1,700万人を超える人が海外旅行を楽しんでいる¹⁾。これまでの旅行は元気な人の忙しい旅行が主流であったが、近年の高齢社会の中ではゆっくりと観光を楽しむ風潮も根付いてきている。こうした時代の変化の中で、何らかの配慮を必要とする人が旅を楽しむ観光UDの仕組みづくりも必要になってきている²⁾。

2. 観光UDとは

旅行は、老いも若きも広い年齢層で楽しめる余暇活動である。そのような旅行を誰でも楽しむための観光UDの理念としては、「年齢・性別、言語・国籍、能力のいかんにかかわらず、すべての人が同質で同等の旅の楽しみが享受できるツーリズム」ということができよう。

3. 観光UDの考え方

観光UDの考え方としては、①誰でも旅を楽しむための公平性、②さまざまな旅行者に対応するための多様性、③さまざまな場面でフレキシブルに対応できる柔軟性、を基本として、機能的には、④交通機関などのシームレス化によって旅の連続性を確保すること、⑤情報などの面で理解しやすくなりやすいこと、⑥費用面でも価格合理性をもつこと、⑦事故や医療面での安全性を確保すること、⑧移動しやすくするための空間的な余裕を確保し、旅行者側では、⑨旅の感動といわれる情動性が確保され、⑩美的感覚などの五感による旅の楽しみを發揮でき、⑪スロートーリズムといわれる時間的余裕を備えることが要求されるであろう。

4. 観光UDの分野

観光UDを大きく分けると図1のように、①旅行で利用する鉄道、航空機、船舶、自動車やバスなどの交通機関、歩行環境や公園などのまちづくり、観光施設、テーマパーク、宿泊施設などの建築物、歴史的建造物、自然環境などの観光インフラ分野、②福祉タクシーや人的サービスにおける福祉面

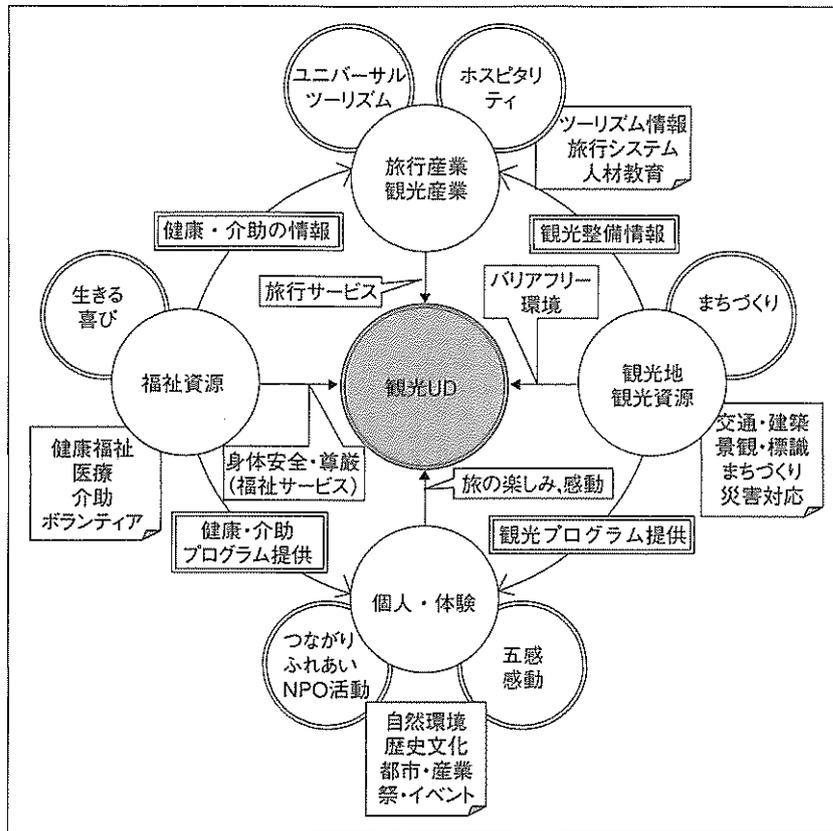


図1. 観光ユニバーサルデザイン(UD)の構図

草薙威一郎©Lichiro KUSANAGI (2005年作成)

や、以下(II「旅行上の具体的な医療課題」参照)の医療などの観光福祉的分野、③バリアフリー旅行情報や旅行商品流通などの観光システム分野、④旅行者自身の「旅の体験・感動・ふれあい」の4つに分けられるであろう。ただ交通機関などハード面のバリアフリー化がいくら充実したとしても、それを支える他のソフト面が充実しなければ、旅行者は心から旅を満足することはできないであろう。ハード、ソフトのそれぞれの分野が協力し合って観光UDをつくり上げる必要があるわけである³⁾。

II 旅行上の具体的な医療課題

上記でまとめた観光UDにおける医療の分野は、下記のような3つになるであろう。

1. 予防医学、健康増進面の課題

わが国は世界で最も高齢化の進んだ国となったが、人はいくつになっても健康的な生活を送れるように、健康維持のために努力している。そして外に出たり旅行したりすることの中には適度な運動も含まれており、精神の活性化など「自然の治癒力」もあると考え

られる⁴⁾。その効果は、旅先で気分転換したり、リラクゼーションや適度な緊張感を感じたり、自然の風景に感動したりするなどの精神的効果や、古くからの湯治や温泉療法を活用したり、海水を利用するタラソセラピー、森林のフィトンチッドによる森林浴、歩くことによるウォーキングなどの身体的効果もある。このような健康持続、健康増進の意味で「ヘルスツーリズム」の言葉も流布している。

2. 慢性疾患、生活習慣病面の課題

2番目の課題は現に疾患をもっている人の旅行課題である。厚生労働省の「身体障害者実態調査」をみても、加齢のため、あるいは慢性疾患の不調のため、永続的な医療が必要な「内部障害」の人が増えている⁵⁾。内部障害の中には、人工透析や腹膜透析を必要とする腎臓疾患、不整脈などで心臓ペースメーカーの必要な心臓疾患、在宅酸素療法(home oxygen therapy ; HOT)を必要とする肺臓疾患、人工肛門・人工膀胱のオストミー術をした大腸・肛門疾患のほか、小腸疾患、HIV疾患が含まれる。

近年、旅行の成熟化によって慢性疾患をもった人の旅行可能性は広がっている。もちろん旅行に共通していえることは、旅行先の気候、食べ物、地域による環境変化に留意すること、疲労するような無理な日程は避けること、常用している薬は十分用意すること、健康状態・既往症などを記した診断書をもつこと、などである。

次に個々の内部障害のある人の旅行について若干述べてみたい。

1) 人工透析の場合

事前に透析に関する個人医療情報を旅行先の透析施設に送り、肝炎などのチェックを受けた上で透析を行う方法が一般的になってきている。海外旅行においても、ハワイなどでは日本人の受け入れに慣れた透析施設が増えている。ただ機器、医療事情の異なる海外では、信頼できる透析施設の選定が重要である。また腎臓移植の多いアメリカでは、透析療法は移植までの過渡的措置という考えから、透析設備は日本のほうが進歩しているという旅行者の声もある。また腹膜透析の場合は、透析液の運搬と清潔な施療室確保が課題である。

2) 心臓ペースメーカーの場合

心臓に負担のかかる旅行行動は避けるべきであり、またペースメーカー作動に影響する電磁波は避けるように配慮しなければならない。海外旅行の場合は、空港セキュリティチェック時におけるX線検査で影響のある場合がある。そのような場合には、空港係員に申し出ることによって、X線検査の代わりに係員による身体検査に代えることが一般的である。

3) オストメイト(人工肛門・人工膀胱)の場合

トイレ内でのパウチなどの洗浄設備が重要である。近年、国内ではオストメイト用洗浄設備のついたトイレも増えてはきているが、まだまだ十分な数が整備されているとはいえない。また海外においては、そのような設備をもったトイレは稀にしかみられない。

この他にも糖尿病の場合は食べ物やインスリン注射の配慮が必要であり、高血圧など生活習慣病による場合の旅

行配慮、難病指定の人への旅行配慮などの課題もある。

また、脳血管障害後遺症による半身不随の人、失語症の人、高次機能障害の人への配慮、喉頭がん後遺症による発声障害の人への配慮も必要である。その他、花粉症や食物アレルギーなどアレルギー関連の旅行課題も増えている。

3. 緊急時など、その他の医療関連課題

その他の医療課題で最も重要なことは、緊急時の救急医療である。旅行の容易化、高齢化に伴って旅行者の層は多様化している。これまでは健康な人しか旅行しないと考えられてきたが、その人たちでも救急医療が必要な場合もある。救急車が来るまでの人工呼吸や心臓マッサージなどの初期救急は、医療関係者だけでなく、観光関係者にも必要な心得であろう。最近、航空機や主な観光地でも心臓除細動器を装備した個所は増えており、実際の使用例も報告されている。

また阪神大震災以降、国内では災害時に配慮の必要な人の避難方法が課題となってきている。旅行者への配慮も同様である。宿泊施設での火災避難訓練や、津波・地震での避難経路などでも、疾患や障害のある旅行者も念頭に置いて計画をつくる考えが大切である。

その他にも、観光地における車椅子や浴室でのシャワーチェアなど福祉機器の貸し出しサービスも広がっているし、また地元ヘルパーによる介助の必要な人への入浴介助サービスなども始まっている。

III

呼吸器に関する旅行課題

呼吸器疾患には、風邪や鼻炎、ダニやハウスダストなどのアレルゲンの吸引や寒冷刺激・運動などが原因の気管支喘息、長年の喫煙や大気汚染による慢性気管支炎、肺気腫などがある。またこの中には、肺結核後遺症などとともに慢性呼吸不全により、薬物療法以外に酸素を補う必要が出てHOTを行う人も増えている⁶⁾。

1. 旅行環境

呼吸器疾患をもつ人が旅行する場合には、交通機関の種類と旅先の環境が課題となる。交通機関で最も問題となるのは航空機である。大型航空機は高度10,000m程度を飛行するが、機内気圧は0.8気圧程度(高度1,500m程度の高山と同じ)、機内の湿度は10~20%と大変乾燥している。そこで肺気腫など酸素が欠乏する人はさらに酸素欠乏に陥ったり、機内の乾燥により風邪を引いたり気管支喘息の発作を誘発する可能性もある⁷⁾。

また旅行先に到着してからは、気候や環境の変化により疲労がたまりやすいので、疲労を呼ぶ強行日程は避けるようにしたい。また宿泊施設では空気調節の関係で、室内の湿度が大変低くなっている場合もあるので注意したい。

2. 在宅酸素療法(HOT)利用者の海外旅行

HOT利用者の旅行は、酸素補給や

健康管理などの面で困難な課題が多かった。しかしHOT利用者の社会活動を広げるためにも、徐々に旅行が発達になっている。また海外では、旅行はHOT利用者が自立した管理ができるかの基準になるという意見もあるほどである。事実国内旅行は一般的になっているが、海外旅行も数年前からシステマ的に整ってきた⁸⁾⁹⁾。

HOT利用者の海外旅行では、多くの点で配慮が必要である。ハワイにおいて実施した例では、東京からハワイ間の航空機内での酸素補給、現地での旅行者が持参する携帯酸素ポンベの酸素補給、ホテルなど宿泊施設での酸素濃縮器設置などの準備を行った。また現地での日本語対応、24時間の非常時対応、英文対応書の作成、必要に応じて介助者派遣の仕組みも、現地医療社も用意されている。しかし、酸素は航空機へ持ち込む際の危険物扱い品目であり、近年のICAO(国際民間航空機関)による医療機器機内持ち込み基準が厳しくなっているために旅行困難度が増している。

ただこれまで現地に行かれた方から、「ハワイは大変温暖な気候であり、国内ではいつも30分しか散歩ができなかったのに、ハワイでは1時間半以上も散歩を楽しめた。おかげで数年前の体の状態に戻れた感じがする」との喜びの声をうかがった。これはシステム開発に携わった1人として仕事冥利に尽きる謝礼の言葉であった。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、海外勤務健康管理センター浜田篤郎先生、海外医療支援協会の先生方に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 国土交通省：観光白書・平成17年版。2005
- 2) 草薙威一郎：障害をもつ人と行く旅。東京、エンパワメント研究所、1998
- 3) 草薙威一郎：誰もが旅行しやすい環境を作る。新たな観光まちづくりへの挑戦。東京、ぎょうせい、2002
- 4) 日本旅行業協会：旅と健康に関する調査。2001
- 5) 厚生労働省：身体障害児・者実態調査。2002
- 6) 浜田篤郎：呼吸器疾患の方が海外旅行をする際の注意点。海外医療支援協会HP、2005
- 7) 打越 暁：海外出張者で問題になる呼吸器疾患。海外勤務と健康 21：22-25、2005
- 8) 相沢久道：海外旅行者へのアドバイス—慢性呼吸器疾患。臨床と研究 79：573-578、2002
- 9) 滝沢 始：慢性疾患や特定条件下での海外旅行5—慢性呼吸障害。治療学 38：326-329、2004

草薙威一郎

昭和48年 早稲田大学教育学部社会科

社会科学専修卒業

現在、JTMバリアフリー研究所所長

専門分野：観光ユニバーサルデザイン、

バリアフリー旅行研究

E-mail：kusanagi@tourism.jp